

○今回はじめて編集に携わった。今号の目玉は、何といっても藤原新也氏の寂聴さん追悼の文章。自分は以前より氏が運営するウェブマガジン CatWalk の会員で、その経緯で連絡をとり実現した。元の文章は今年、五月に双葉社より刊行された『メモント・ウィータ』の「闇に咲く花」。それを転載という形で特別再録させて頂いた。この追悼文は藤原氏にしか書けない文章で、読みながら心が震えた。ぜひこの本も手に取って読んでほしい。この場を借りて、快く転載の許可をくださった藤原新也氏に感謝を。長年の藤原ファンで、氏を通して瀬戸内寂聴を知った身としては、とても感慨深い。(真)

○先日、NHKのEテレで「瀬戸内寂聴／インド 死をめぐる対話」第一回（お相手は藤原新也氏）の再放送を観た。その中で、「死に目に遭えなかった人は亡くなった気がしない」という主旨の発言が故人にあった。それに倣って言うると、この私には、京の寂庵に今も健在のひととおもわれてならない。さて今回、N賞研究の第一人者である川口則弘氏に、無理を言って書いていただいた。故人とN賞とのかかわりがテーマでは、材料が限られて書きにくいはずが、みごと一文をものされ、脱帽のほかない。また、この夏、出家前一九七一年の訪韓の足あとをたどった崔順愛氏の紀行文も出色である。味読された。(征)

○藤原さんは徳島に寂聴さんの墓がないことを気にされていたが、二〇二二年五月、井戸寺に分骨され、私たちを見守ってくれている。今号は川口さん、堤さんが、新風を吹き込んでくれた。直木賞候補に挙がったときの寂聴さんの当惑が如実に伝わってくる。当時、作者が与える印象や題材で二つの賞は分類されていたのではと疑ってしまう。堤さんは思いがけず寂聴さん終焉の地・京都で暮らすことになった。自由はあっても「どん底」の暮らしだった二〇歳代の寂聴さん。転々とした住所は、すべて堤さんの散歩コースにあったという。苦しみの一端を寂聴さんが書いたからこそ、今、私たちは励まされている。(紀)

「寂聴」第4号 2025

発行日 2025年11月9日
 発行所 瀬戸内寂聴記念会
 〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802
 Fax : 088-661-3292
 Email : kikanshi@setouchijakucho.com
 URL : <https://www.setouchijakucho.com/>
 発行人 東條 真理子
 編集人 竹内 紀子
 印刷 徳島県教育印刷株式会社